



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

30

山本有三

中央公論社

日本の文学 30

©1965

山本有三

昭和40年2月25日初版印刷
昭和40年3月5日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 中央精版印刷株式会社製本部

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

波

路傍の石

無事の人

嬰兒ごろし

同志の人々

注解

解説

年譜

阿部知二

522 506 496 474 455 388 198 5

口 挿
絵 画

「路傍の石」
「波」
「路傍の石」

和田三造
和田三造
和田三造

山本有三

妻

一ノ一

行介（コースケ）はいつもの停留所でおりた。おりるとき、帽子に手をやらなくてはならないほど、風が強かった。

彼は赤つ茶けた風に押されて歩いて行った。とき／＼、紙くずや、こつばなぞが、トンボがえりをしながら、彼のズボンのあいだをすりぬけて、ころがって行った。

行介はオーバーのえりを立てていたけれども、それでも、カラーの下まで、つめたい空気が流れこんできた。

そのうえ、どうかすると、クギでも投げつけられるように、おゝ粒の砂がバラ／＼と、彼のえり首に落ちてきた。

彼は、横町にはいったら、いくらか風がよけられるだろう、と思つた。急いで、うちのほうへ曲がる最初の横町を曲がつた。しかし、しばらくしてから、「きょうは寒いから、婦りに肉でも買つてこよう。」けさ、出かけに、妻にそう言ったことを思いだした。

そうだ。肉を買つて行つてやらなくては。彼は、また電車どおりに引返して、突きあたりの肉やにはいった。

板まえが肉を切っているあいだ、行介は厚いマナイタの前に突つ立って、ホウチヨウの動くさをぼんやり追いかけていた。なま肉のにおいが鼻を打つて、彼の胃ぶくろを驚くほど波だたせた。

マナイタの上に斜めに落ちていけるゆう日が、鋭い刃ものにあたつて反射すると、ちょうど油でもはねたときのように、天井や、肉をぶらさげである大きなガラス戸ダナに、きらつ、きらつと、ちいさい光をはねかせた。

突然、ふわつとしたものが、ひざのあたりにからみついた。彼はびっくりして下を見た。ふる新聞が風に吹きまくられて、飛んできたのだった。なんのことはない、木の根かたに落ち葉が吹き寄せられるように、彼の足もととは、一時の吹きだまりになったのだ。

「こんなところに突つ立つてると、さまがないや。」
心の中でつぶやきながら、彼はいま／＼しそうに新聞

を往来にけとばした。しかし、べつとりと張りついたようになって、ふる新聞はなか／＼足から離れなかった。

彼はしかたがなしに、ほこりだらけの紙を指でつまんで、かざしにも放してやった。ぼろ／＼に破れた、大きな紙きれは、また往来をころがって行った。

肉やの店さきに立つたびに、いつも思うことだが、どうも、この、待っているあいだぐらい、まの悪いものはなかった。

板まえば切った肉を竹の皮の上に薄くのばして、丁寧にならべていた。それから、ハカリの上に乗せて、少しばかりの肉をたしたり、へらしたりしていた。行介はお預けをくった犬のように、黙ってそれをながめていた。

「見並(ミナミ)君。」

肩のところで声が出た。ふり向くと、一つのえ顔に突きあたった。園田(ソノダ)だった。

行介はちよつとしよげたが、向こうが笑っているの、彼もてれ隠しに、ほゝえんで見せるよりほかはなかった。

「ごちそうだな。」

「いやあ、とんだところを見つかったな。」

一ノ二

「あい変わらずだね。」

園田の顔には笑いがまだ残っていた。

「何があい変わらずだい。」

行介はおつかぶせて言った。「あい変わらずのろいね。」「あい変わらず女房孝行だね。」「あい変わらず……」園田のあい変わらずに負けていたら、どんなことになるかわからない、と思った。

「いや、あい変わらず気がきいてるってんだ。」

「ふん。」

「おれがくることを察して、牛肉を買っておこうなぞは、感心だよ。」

「たぶん、そうくるだろうと思っていた。おい、心配しなくてもいいよ。君にはコマ切れを買っておいた。」

「コマ切れ、コマ切れか。」

「何を言っているんだい。みつともない。」

「おい。——女房にコマ切れを買って帰りけり。つてのは、どうだい。」

「どうもうるさくつてかなわらないな、迷句をひねくるやつが、そばにいと。」

「しかし、実感があつてなか／＼いいだろう。」

「うん、たび／＼コマ切れを買いつけてるとみえて、その点はさすがだね。」

「まだあんなことを言つてやがる。もういい加減に降参しろよ。」

「はゝゝゝ。」

「お待ち遠さま。」という声が響いた。そして、竹の皮づつみが行介の前に突き出された。彼はそれを受け取ると、園田とつれ立って肉やの店を出た。

「だが、ぼくがあすこにいること、よくわかったね。」

「なあに、君の姿は三町もさきからわかっていた。」

「どうして。」

「ぼくはこの道をやってきたんだもの、つきあたりの店に、君の丸まった背なかが出っぱってிரいや、いやでも目につくじゃないか。おれは道々考えてきたんだが、どうもなんだね、ネコ背ってやつは、なか／＼句になりにくいね。」

「バカにするな。じゃ、君は、ぼくのところへ行つたのかい。」

「うん、もう帰っているころだと思って。」

「それなら、待っていてくれればいいのに。」

「おれもそうしようと思つたんだが、だれもいなかったもんだからね……」

「かまやしない。あがりこんで待つてりゃいいじゃないか、ほかのうちじゃあるまいし。」

「ところが、戸がしまつてゐるんだ。引っぱつてみたけれど、あかなかつたから、しかたがない、帰つてきたのだ。」

「そうか、そりゃ失敬した。じゃ、女房、どつかへ買い物に出たんだらう。」

きょうは土曜日だし、ちようど園田もやってきたところだから、久しぶりでひと口やりたいと思つて、行介は途中、取りつけのさか屋に寄つて酒を頼み、うちに帰つた。うちは、園田が言うように、戸がしまつてゐた。妻はまだ帰つていないらしい。彼は裏ぐちにまわつて、あま戸のかけ金はずした。

一ノ三

中はまっ暗だった。

行介は手さぐりで電燈をさがし、スイッチをひねつた。それから、急いで玄関に行つて、格子（コーン）とあま戸をあけた。

「いや、お待ちどお。」

「ほんとうにお待ち遠さまだ。なんだね、肉やのマネイタの前に立たされるのも、いい図じゃないが、戸のしまつたうちの前に、ちよこなんと突つ立つてるのも、あんまりありがたいもんじゃないね。」

園田はへらず口をたゞきながら、あがつてきた。

行介は、なが火バチの横にすわろうとすると、煮えたぎつた鉄ピンが、重たいフタをパタリ／＼押しあげてゐるので、彼は立つたまゝ、あわてて鉄ピンをわきにおろ

した。「戸じまりをして、外に出て行くくらいなら、火をいけて行けばいいのに。」腹の中で、彼はるすの妻にこごとを言った。

しかし、じつを言うと、赤々とおこっている火は、吹きつつあらしの中を、冷えきって帰ってきたからだには、このうえもなくうれいものだった。ふたりは火バチの上を手をかざしながら話し合った。

園田がやってきた用むきは、金のことだった。まだ来月と思っていた細君のお産が、急におとしいあつたものだから、てんてこ舞いをしてしまった。で、五十円か、三十円ばかりほしい、と言うのだった。ふたりは、しょつちゆう、このくらしいの金を貸したり、借りたりしている仲だった。園田はずぼらのように見えて、案外かたい男で、金銭でまちがいのあつたことはなかった。ことにおもしろいのは、それを返しにくるとき、味の素だとか、塩せんべいだとか、その利息に相当するくらいのを、いつもきつと持つてくることだった。行介も、借りたときは、やはりそうすることにしていた。

園田の話は事情が事情だし、それに、ちやうど三十円ばかり手もとにあつたから、さっそく用だてることにした。行介はその話が一段落つくと、台どころに立って行って、ネズミイラズだの、戸ダナだのを、しきりにガタビシいわせた。

「何を見つけてるんだい。」

「おかしいな。どこへしまいいくんじまったのかしら。どうも女房がいないと、しょうがないな。」

「おい、ごちそうなら、また、ゆつくりなりにくるよ。」

「まあ、そんなことを言わないで、ぼくがせっかく買ってきたんだから、肉を突つ突いて行けよ。」

「しかし、奥さんがいないところだからね……」

「きょうは、バカに遠慮するじゃないか。」

「そういうわけでもないが、金を借りたり、ごちそうになつたりしちや、少し話がりま過ぎるからな。」

「いやなことを言うやつだな。そんなことを言ってるひまに、いいから酒でもつけといてくれよ。」

今しがた小僧が持つてきた酒のトックリを、園田の前に押しやった。

「驚いた。細君が、るすだと、おれのほうにまで雷がおつこつてくる。」

「つまらないことを言うなよ。」

「しかたがない。細君が帰ってくるまで、おかん番をつとめてやろう。」

「それだ。恩をきかせてから飲もうつてんだから、君は太い料けんだよ。」

「なに、そんなことはありやしないが……」

「ナベ、ナベ、ナベと。いったい、どこへ入れちまやが

「つたのかな。」

「なんだい、牛ナベかい。」

「うん、困ったな。こゝになければと——」

「そのぐあいじゃ、こゝのうちでは、めったに牛肉なんか食わないと見えるな。」

「飲まないさきからその調子じゃ、飲んだら何を言いだすかわかりやしない。」

「おい、いったい、そんなに飲ませるつもりかい。」

「すぐそんなことを言う。だから、酒のみはいやしいってんだよ。」

「そうものをはつきり言うもんじゃやない。酒がはいらないうちに、まっかになつてしまふじゃやないか。」

一ノ四

「へんなもんだな。自分のうちでいながら、台どころときたら、どこに何があるんだか、さっぱりわかりやしない。」

「實際なんだね。いるときには、さほどにも思わないものだが、いないとなると、これで、不自由なものだね。」

「おい、つまらない親切なんか、よしてくれよ。」

「だが、そういうもんじゃやないか、いったい、細君なんでものは……」

「あつた、あつた。なあんだ。こんなところに突つこん

であつたんだ。」

米ビツの横に二寸ばかりあきがある、その狭いあいだに、牛ナベはむき出しのまゝ立てかけてあつた。

「そうか。じゃ、いよ／＼君のしいれてきた牛肉にありつけるわけだね。」

「今までは、どうなることかと案じていたって、言やしないか。はゝゝゝ、さあ、これでネギさえあれば、文句はないぞ。ところで、ネギはと……」

行介は台どころのあげ板を開いて、下をのぞいた。暗い中に白く光つたものが十本ばかりそり返っていた。彼はそれをみんな取り出して水で洗い、あぶなっかしい手つきをしながら、ザクリ／＼切りはじめた。

こうしてネギが買ってあるところを見ると、妻は彼が肉を買ってくることを、忘れているものとは思えない。しかし、今もつて帰つてこないというのは、どうしたわけなのだろう。彼の帰ってくる時間は十分承知のはずだし、それに、その時刻に、うちをるすにするというようなことは、今までに、ついぞなかったことだけに、行介はホウチヨウを動かしていながらも、考えは絶えずそこに走っていた。

「おい／＼、カフスがぬれるよ。」

園田の声で、行介の考えは断ち切られた。

「洋服を着かえたらいいじゃないか。」

「いや、めんどくさい。もうじきだよ。」

「それじゃ、細君のエプロンを前にかけるんだね。そうして、ついでに、あたまに白い帽子をのつけるんだ。」

「バカにするな。」

「おい、新まえのコックさん、指を切らないように頼むよ。」

「大丈夫だよ。だが、こんなことをしていると、君と自炊していたころが思い出されるね。」

「あのときもさ、君はよく指を切ったぜ。おかげで、ぼくは、なんと血ぞめのタクアンを食わされたかしれやしない。」

「しかし、君がいくらかでも血のめぐりがよくなったのは、あれからだ、と思や腹も立たないだろう。」

「へん、あきれてものも言えやしない。——そろ／＼おチョウシをつけ始めようかね。」

「なんだい。まだやらなかったのかい。」

「まだやらなかったかって、牛ナベが見つかからないうちから、おかんをしちや、つき過ぎちまうじやないか。」

「なるほど、おゝきにそうだね。——おい、トックリは茶ダンスにはいっているぜ。」

「如才はないよ。もうちゃあんと出してある。」

園田はトックリに酒を移して、しずかに鉄ビンの中に沈めた。

「え、君。この、ポチャリという音は、なんとも言えないね。」

「そうだね。」

「そうだねは、話せないな。なんじやないか、芝居で言や、これは幕あきの木みたいなものだ。こいつがポコリだの、ポチャリだのときた日には、酒の味はなくなっちまうからね。おれは女房にだって、こいつばかりは任せはしないよ。——女房ってば、奥がたはバカに遅いじやないか。」

一ノ五

「女房なんかいなくなつて、かまやしないよ。さあ、できた。」

行介は切ったネギをサラにもつて、洗った牛ナベといつしよに茶のまに運んだ。

やがて、肉がジユク／＼煮えだして、火バチの上は急に活気づいてきた。

「酒もついたし、肉も煮えてきたし、もう、なんにも言うところはないや。」

二、三杯ですぐとろんとしてしまふ行介は、目がねの曇りを気にして、度の強い近眼鏡をはずし、息を吹きかけては、しきりにハンケチでふきはじめた。

「これで女房さえ帰ってくりや、だろう。」



園田はゆるやかに、杯をくちびるのところに持って行くながら、少し目じりをさげて、行介の顔をのぞいた。

「なあに、女房なんか、どうだっていいさ。」

「なんとか言ってる。」

「全くだよ。」

「そんなことを言うと、向こうじゃ、もう帰ってまいりませんよ、と言ってくるぞ。」

「ところが、そんなのとはちがうんだからね。」

「あきれた。こりゃ手ばなしだ。」

「まあ、なんにもありませんけれども、どうか十分めしあがってください、って、ところかね。おい、君。こっちのほうで煮えているぜ。」

「おれはもうたくさんだよ。おらあ帰るよ。バカ／＼しい。」

「さようでもございましょうが、これは手まえが買ってまいった肉でございますし、こちらは手まえが刻んだ……」

腹の底には何かつめたいものがよどんでいながら、行介はへんにはしやぎたかった。しかし、冗談を言っているうちに、自分でも空しくなかって、途中で急にやめてしまった。

園田は帯のあいだから時計を出した。行介はそれを見ると、おどすように、

「おい、帰るのはまだ早いぞ。」

「う、うん。」なま返事をしながら、園田はなお時計をながめていた。

「もう少ししろよ。」

「う、うん。——しかし、遅いな。」

「まだ、そんな時間じゃないだろう。」

「いや、奥さんがさ。——買い物にしちや、少しおそ過ぎるじゃないか。」

「……………」

「どこへ行ったか、心あたりはないのかい。」

「そうだね。」

「おい、隣へ行って聞いてこいよ。ちょっとお尋ねいたしますが、手まえどもの家内はどこにまいましたらうって。」

「なんだ。本気にしていると、すぐちやかしやがる。」

「しかし、ほんとだよ。何かことづけがあるかもしれないぜ。」

「いいよ。女房なんか、いたって、いなくたって。君さえいれば。さあ、一杯いこう。」

「おい、おれを女房と取っちがえちや困るよ。ぼくは奥がたが帰ってくりや、立ちどころに引き取らうって人間なんだからね。」

「そう帰る／＼っておどかさなよ。」

「いや、そういうわけじゃないけれど、なにしろ、うちのほうがなんだからね……………」

「あ、そうか。はゝゝゝ。——そんなに子どもってかわいいもんかね。」

一ノ六

「まあ、持ってみろよ。」

「いやにおやじぶるな。」

「しかしね、君……………」

「驚いたな。これが当年の園田だと思うと。」

「まあ、なんとも言う方がいいさ。人間、子どもを持たないうちは、まだ人生の半分しかわからないんだよ。その意味で、君なんかは半人まえぐらいの値うちつきりないんだぜ。結婚して、まだやっと一年だろう。」

「おい、はじめておやじになったって、そう威ばるなよ。」

「いや、べつに威ばりゃしないが、なんだよ、君、子どもってものは……………」

「子ども、子どもって、そんなに珍しがることはないじゃないか。ぼくなんか、子どもなら、なんにんでも持っているよ。」

「なんにんでも？」

「うん。」

「おい、ほんとうの話かい。」

「ほんとうさ。学校へ行けば、子どもなんかうよ／＼している。」

「なあんだ。小学校の生徒か。君はたちが悪いよ。すぐ人をかつぐから。」

「いや、かついだんじやない。まじめな話だ。」

「バカ／＼しい。学校の子どもなんか、なんにんあつたつて、しかたがないじやないか。」

「そんなことないさ。」

「いや、君がなんと言つたつて、他人の子じやだめだよ。自分の子でなくつちや。どうも、小学校の先生なんて、しょうがないね。こんなことが、わからないんだから。」

「何がしょうがないことがあるものか。自分の子だの、他人の子だのと、区別をつけるようじや、学校の教師はつとまらないよ。」

「そりや教壇に立つたときの話だ。まあ、自分の子どもを持つてみろよ。どんなもんだか。」

「いや、そんなものは当分まっぴらだね。」

「は／＼／＼。実際、女房さえ食わせられないんだからね。——おや、もう九時になる。こりや驚いた。君、すまないが、ほく、失敬するよ。なにしろ、赤んぼうと産婦とおきつばなしなんだからね。」

「そうか。そりや悪いことをしたな。あんまり引きとめ

ちやつて。」

「なあに／＼。じゃ、奥さんが帰つたら、どうかよろしく。」

「近いうちに、赤ちゃんを見せてもらいに行くよ。」

「うん、是非やつてきてくれたまえ。」

園田が帰つたら、家の中は急にひっそりとしてしまった。行介はつまらなそうに、食器の取り散らされている中に、ごろりと横になった。そして、今まで園田がすわつていた座ぶとんを、寝たまゝ腕をのばして引っぱり寄せ、二つに折つて、あたまの下にあてがつた。

牛ナベは、つゆが切れたとみえて、ジイ／＼火バチの上でうなつていた。焦げつくような異臭が鼻を突いたけれども、彼は起きあがるつもりもなかった。

そのとき、裏のほうで何かガチャガチャーンというはげしい音がした。妻が帰つてきたのか、とも思ったが、それにしても、少しするど過ぎる物おとだった。隣の物ほしザオが吹き落とされたのかもしれない。外はあい変わらず風がひどいらしい。

一ノ七

行介は突然むっくり起きあがつて、自分の机のところに行った。彼女は急な用事でもできて、外出したのかも知れない。何か書いたものが置いてありやしないか。彼

はそう思つて机の上を調べたけれども、いや、引きだし
のままで調べたけれども、それらしいものは見あたらな
かった。

いったい、きぬ子はどこへ行ったのだらう。彼にはま
るで見当がつかなかった。園田が言つたように、實際、
隣へ行つて聞いてみようか。しかし、それもあんまり気
がきかな過ぎる。第一、何かことづつてがあつたくらいな
ら、さつき、裏ぐちをあけてるときに、隣のおかみさん
はおむつを干していたのだから、あのとき、ちよつと言
つてくれそうなものだ。黙つていたところをみると、隣
にも、なんにも言つて行かなかつたものに相違ない。し
てみれば、そう手まの取れる用事とも思えない。それだ
のに、時計はもう九時を過ぎてゐる。

どうかしたら、また、おやじが……。

きらつとその考えがきらめいたが、行介は強くそれを
うち消した。いくらなんでも、また、おやじがそんなこ
とをしようとは考えられなかつた。近ごろは非常におと
なしくなつてゐるようだし、ことに、ふたりの結婚を心
から喜んでゐたことは、彼にもはつきり見えていたのだ
から……。

あるいは、だれかに誘われて、活動でも見に行つたの
だらうか。いや、るすにそんなことをする気づかいはな
い。見に行くなら、彼が帰つてきてから行つても、十分

まに合うはずだ。

行介は今をはじめ知つたように、あわてて牛ナベを火
バチからおろした。ネギがまっ黒になつて、ナベにこび
りついてゐた。

彼はチャブ台のそばにおいてあつたさか屋のトックリ
を引き寄せた。振つてみると、まだいくらか残つてゐる
らしい。彼はついでに飲み、ついでに飲み、ありつたけ
飲んでしまつた。ひや酒が妙に、はらわたにしみ渡つた。
大きなあくびをして、彼は腕をのばした。からだかひ
どく窮屈だな、と思つたら、洋服を着かえてないことに
気がついた。

彼は大儀そうに立ちあがつて、タンスの前に行つた。
そこには、着がえがちゃんと疊んであつた。彼は妻の心
をうれしく思いながら、洋服をぬいで、ふだん着に着か
えた。しかし、うしろから着せかけてくれる、やさしい
手のないことが、ものたらなかつた。

それから、クツ下をぬいでタビをはこうとすると、足
のさきに関かカサリとさわつたものがあつた。彼はごは
ん粒を踏みつけたときのような、いやな気もちがした。
「なんだらう。タビの中に。」

彼はへんな気がしながら、タビを裏がえして振つてみ
た。四角い、桃いろのものが、こぼれ落ちた。

封筒だつた。表に「先生さま」、裏に「きぬ子」とし